

# I 令和4年度の運営総括及び来期の課題

平成19年9月の開館から丸15年を迎えた。今日まで、述べ62万人を超える来館者が、白根児童センターを利用してくれた。コロナ禍となり約3年、with コロナも定着し、行事も定員を少なくしての実施や二部制にしての実施、「〇〇ウィーク」と題し分散して参加できるような形式で再開し始めた。平日の午前中や土日を中心に乳幼児親子が多く訪れ、伸び伸び遊んでいる様子が見られた。『クリスマス会』や『豆まき会』などの季節行事になると特に利用者からの反応も良く、父親や祖父母と家族一同で参加してくれる親子も多い。児童センターだけでなく、様々な行事ごとが減った今、行事ごとを求めている親子は多く、その分利用者も情報収集する力が高まっているように感じる。それに伴い、白根児童センターとしても情報発信する力を高めていきたい。

また、午後からは小学生が元気に来館し、アリーナや集会室、工作室、遊戯室、図書室で元気に遊ぶ様子が見られた。アリーナでは身体を動かして遊んだり、親子でバスケットボールやバドミントンの練習に励んでいる様子が見られた。中学生や高校生にも遊んでもらっている様子もあり、多世代交流も生まれていた。こども凧合戦が中止となり早3年、工作室でミニ凧製作を楽しむ小学生も多く、白根の伝統が子どもたちに受け継がれていることを実感。

夕方からは中高生の利用も多く、アリーナで身体を動かして遊んだり、テスト前になると工作室や図書室で勉強する姿もあった。行事の際は率先してボランティアや小学生たちの手本となる姿を見せてくれる一面も見られた。

白根児童センターで過ごす子どもたちを見守る日々の中で、子どもたちの声に耳を傾け、時には叱咤激励をしながら、ともに歩みを進めてきた。小さいころから通っていた子どもたちが新中学1年生、高校1年生になり、社会人になってからも時折立ち寄っては近況を話していく姿も見られる。長い年月の中で、たくさん子どもたちと出会い、子どもたちの成長に寄り添ってきたごく当たり前の日常が、白根児童センターで過ごす子どもたちにとって、かけがえのない時間として積み上げていることを実感。これからも利用者が安心・安全に利用でき、子どもたち、保護者の気持ちにより一層寄り添い、居場所となれるような運営、地域との連携事業も可能な限りでの実施ができるよう次年度も努力していきたいと思う。

## 1. 乳幼児事業

### (1) 総括

乳幼児親子の中には母親のみならず、父親や祖父母の姿も多く見られた。頻りに足を運んでくれる親子も多く、来館するたびに子どもの成長を共に実感することが出来た。人数を集めて行う大きな行事の開催は難しいものがあつたが、分散して参加できるような形式をとるなどしてコロナ禍に適した行事運営に努めてきた。南区の『子育てオーエンジャー☆みなみ』や『子育て安心ささえ隊 3739』の方々とも連携を取りながら、子育てをする母親支援にも努めた。また、BP講座の開催を通して、母親同士が情報共有できる仲間づくりにも焦点を当ててきた。

### ① 定例行事

『おはなしの時間』は月に2回実施し、絵本や大型絵本、紙芝居などの読み聞かせを楽しんでもらい、2回のうち、1回は読み聞かせ後にカプラブロックを楽しんでもらう時間も設けた。

『ちびっこ工作週間』では月に1回1週間、自宅で作れる工作キットを配布し、工作を楽しんでもらった。

### ② 季節行事

季節行事の『七夕ウィーク』や『七夕チャレンジ』、『ハロウィンウィーク』では特定の日を決めることなく、分散して参加ができるように日程を設け、内容もセンター内に隠れているお題のものを探す等にし、参加者が密にならないように工夫した。

県内での新型コロナウイルス感染者の人数が落ち着いている時期には『ちびっこクリスマス会』、『ベビーマッサージ』、『ちびっこ豆まき会』、『ちびっこひなまつり』を例年より定員数を少なく募集し、開催した行事もあった。『15周年おたのしみ会』は午前を幼児親子対象として、10組ずつ入れ替え制にして実施した。「お菓子釣り」や「くねくね迷路」、「スーパーボールすくい」、「ペットボトルカーリング」、「カプラブロック」を縁日風にして楽しんでもらった。初めての試みとしては『母の日のプレゼント作り』と『父の日のプレゼント作り』、『むし歯予防講座』を実施。コロナ禍以来休止していた『ちびっこ水あそび』を約3年ぶりに復活させ、3密を避けながらの実施した。

### ③ 移動児童館（カプラ遊び）

児童館をより広く知ってもらうために移動児童館を行った。昨年度に引き続き、諏訪木保育園を訪問。『カプラ遊び』は、フランス生まれの積み木を使って、平面での製作を多くしたり、立体での製作を多くしたりと月齢に合わせた製作を行い、カプラの楽しさを伝えた。

### ④ 『子育てオーエンジャー☆みなみ』の方々との共催事業

7月、3月に『ほっぺちゃんひろば』を2回開催した。「コロナ禍」であるという事もあるが、親子さんの来館の様子を見ながら検討した。1回目の「Tamiさんの音楽LIVE」では元気いっぱいの歌を聞きながら、一緒に楽しめてリフレッシュの時間となっていた。2回目は「鷺尾助産師さんの講話」で昨年度は中止のため実施できなかった人気回で『仕事復帰の際に心がけること』をテーマのお話に加え、ママたちの困りごとや質問にも答えてもらえる時間もあり、大盛況だった。

### ⑤ その他

子育て支援事業として2ヵ月～5ヵ月の子ども(第一子)を持つ母親対象の『BP1講座』、そして2ヵ月～5ヵ月の子ども(第二子以上)を持つ母親対象の『BP2講座』を実施。BP2講座は初めての試みだったが、利用者からの反応も良く、受講した母親同士が講座以降も一緒にセンターを利用してくれたり、行事に参加してくれたりという良い繋がりが生まれた。

## (2) 来期の課題

母親支援と親子のふれあいを重点に、地域とともに講座や広場、数少ないながらも行事を執り行ってきた。休日を中心に、父親と幼児が一緒に来館する姿を多く目にする。行事や季節のイベントに、父親も一緒に参加する様子も見られた。利用者のニーズとしては行事の実施もあるが、日々の関わりに重点を置き、まずは親子の居場所づくりに努めていきたい。コロナの感染拡大状況をみながら、両親、祖父母の方々のニーズに耳を傾け、次年度の運営に活かしていきたい。

## 2. 小学生事業

### (1) 総括

平日は、習い事や学校の帰りが遅くなり遊びに来館する子が少なくなっているが、核家族化で共働きが多く、子どもたちが日中を安心安全に過ごせる場として、児童センターが『第二の我が家』のように過ごす子どもたちの姿が少なからず見られる。

今年度は季節行事をはじめ、『15周年おたのしみ会』などお祭り形式の行事を復活させたことあり、子どもたちの反応も良かったように思う。ボランティア事業も職員と一緒に季節の壁面を貼るお手伝いや、ハロウィン・クリスマス会の準備のお手伝い。ちびっこ広場のお手伝いなど、自分でも何か出来るという自信を身につけてほしいと願っての1年だった。子どもたちも役に立てる事が嬉しい様子で嬉々として臨んでくれていた。

### ① 定例行事

アリーナが開放されている期間は毎月、『アリーナで遊ぼう』を開催した。ドッジボール大会、ドッチビー大会、新聞紙雪合戦など、親子行事と同様に定員を少なくしての実施だが、様々な競技に取り組んだ。高学年は行事の司会進行やチームのリーダーを率先して行ってくれる頼もしい一面もあり、それを見ている低学年たちにも良い影響を与えているように感じる。

『折り紙の日』や『作って遊ぼう』は持ち帰り用のキットを渡す形式をとっているが、

### ② 季節行事

季節行事の『七夕』と『ハロウィン』では今年度は「ウィーク」として密にならないよう1週間という期間を設けて行った。幼児親子から中学生まで幅広い年齢層の子が参加し、日ごとに変わるミッションを楽しんだ。夏休み最終日には玄関横のスペースで『水風船で遊ぼう』を実施。ビニールプールと水遊び用おもちゃも使用して、普段はできない外遊びを思いっきり楽しむこともできた。初めての試みとしては『母の日のプレゼント作り』と『父の日のプレゼント作り』を実施。

### ③ 『白根地区社会福祉協議会』と『ろうきん新潟』との共催行事

一部はお金にまつわるクイズ、二部は工場勤務やトラックドライバー、医療従事者

などの様々な職業の方から仕事について質問を交えながらお話を聞くワークショップを実施。貴重な体験ができたと思う。

- ④ 『白根地区社会福祉協議会』と『子育て安心ささえ隊 3739』との共催行事  
2団体と共催の行事で【お花を植えよう】と 【人形劇】を実施。幼児親子、小学生を対象とし、特別感のある行事を楽しんでもらった。

## (2) 来期の課題

子ども一人ひとりの自主性・創造性、社会性、協調性を重視しながら、自分で自由に遊びを見つける手助けをしていくとともに、日々の子どもたちの様子を観察し、変化を見落とさないように、注意深く見守っていきたいと思う。また、日頃から保護者とのコミュニケーションをとることはもちろんのこと、地域の方々にも協力を仰ぎながら、多くの大人の子どもたちの成長を見守っていきたい。また、3密・消毒・換気に配慮しながら安心してのびのびと遊ぶことができるよう環境づくり、整備に努めたい。そして小学校やひまわりクラブとも情報交換をしながら、連携を密にしていきたいと思う。

## 3. 中・高生事業

### (1) 総括

中高生の中には、開館当時から長年児童センターを利用している子どもたちが多く、職員との信頼関係も強く、職員と会話を楽しむ様子も見られる。部活動や習い事との兼ね合いもあり、中々行事ごとに参加することは少ないが、中高生タイム（6時から7時）では、アリーナでスポーツを楽しんだり、定期テスト前には、職員に勉強を教えてもらうこともあった。アリーナが中高生でいっぱいになるくらい、スポーツをすることが楽しみで訪れる子どもが多いのも児童センターの特徴だと思う。

「児童センターをきれいにしよう！」では、率先して小学生のグループ分けやボランティアとしての活躍をみせてくれた。小学生対象の行事である「アリーナで遊ぼう」にも時間が合えば参加してくれて、小学生をまとめ、ゲームを引っ張ってくれる姿も見られた。行事以外にも一緒にドッジボールなどをして遊んでくれる場面もあり、頼もしい中高生の姿に感動すら感じた時間だった。

### (2) 来期の課題

アリーナが閉鎖している期間、体を動かす機会が少なくなる。また、利用できる部屋が制限されることもあり、中高生の『居場所作り』が課題になってくる。学校や部活動との兼ね合いも含めると中々行事参加が難しいため、できる限り子どもたちのニーズに応じていくことで、『居場所』としての役割を果たしていきたいと思う。

#### 4. 地域との連携事業

①『白根地区社会福祉協議会』、『子育て安心ささえ隊 3739』との共催事業

今年度初めての試みとして白根地区社会福祉協議会と子育て安心ささえ隊 3739 との共催で行事を実施することができた。5月と11月にはプランターに花や球根を植える『お花を植えよう』、10月に『親子ヨガ』、3月に『人形劇』と計4回も行事を実施した。4回のうち3回は小学生も対象で、5月と11月に「お花を植えよう」、3月に人形劇団赤ずきんによる人形劇は小学生の反応もよかった。来年度以降も連携を強めていきたい。

②白根ひまわりクラブ合同事業

- ・2ヵ月に1回「児童センター・ひまわりクラブ合同会議」を行った。こどもの情報共有を通して、お互いの連携を更に密にする事ができた。

③大学との連携

- ・新潟県立大学から8月に4年生一人、新潟医療福祉大学から3月、4月に2年生が二人、実習に来てくれた。コロナ禍のため数少ない中ではあるが行事の運営や利用者との関わりに重点をおき学びを深めてもらった。学生たちが企画立てた行事も実施し、遊戯室で身体を動かして遊ぶことができた。